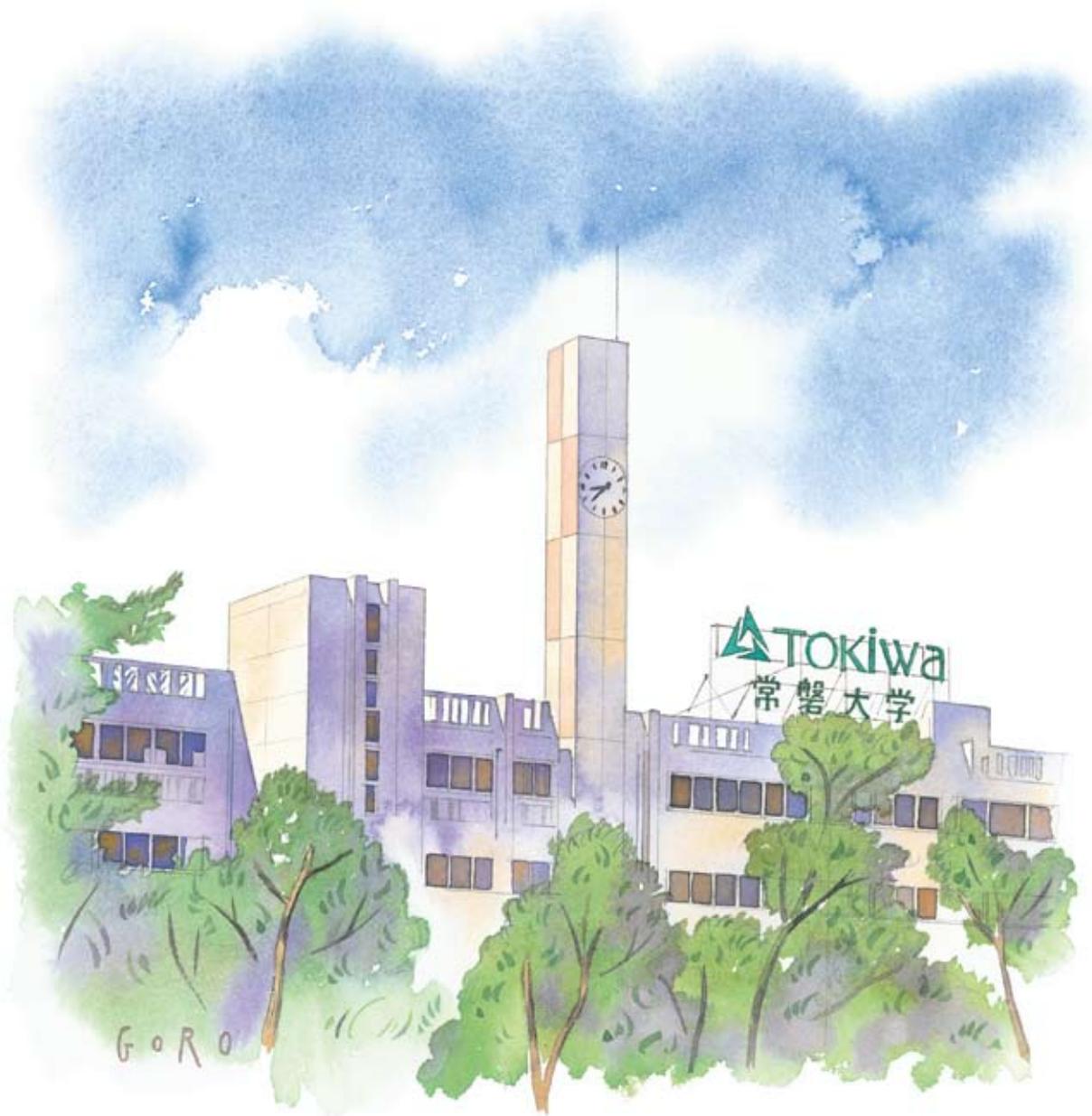


常磐

TOKIWA

7

vol.
Sep. 2006



常磐短期大学創立40周年を迎えて

40年の歩みと これからの 常磐短期大学

1966年、女子の社会進出への期待が大きくなる中で、有用な人材を社会に送り出そうと常磐短期大学は創立されました。社会の変化とともに学科改組を繰り返しながら発展し、地域の高等教育機関としても重要な役割を果たしてきました。近年、短大への進学率が下降の一途をたどる中、多くの学生を集め、就職率も好調という常磐短期大学の強さの秘密と、今後の課題と展望を40年を振り返りながら、それぞれの立場から語っていただきました。



毎年きちんと就職ができるということは、しっかり学習した先輩たちが、着実に仕事をしている証です。

今だからこそ、働くことが女子として人として、どういう意味を持つのかをみんなまで考える必要があります。

学校でファーストステップを上手に踏ませられれば、次のステップは学生自身が実力で踏んでいけるはずです。



出席者(右から)

- 千葉 茂 生活科学科長
- 安田尚道 キャリア教養学科長
- 佐藤啓子 常磐短期大学名誉教授
- 竹中治利 常磐短期大学副学長(司会)
- 中原経子 常磐短期大学名誉教授
- 江波諱子 幼児教育保育学科長

創立者諸澤みよ先生の理念を受け継いだ短大創立。

竹中 本年で常磐短期大学は創立40周年を迎えます。今後も短期大学として在るべき姿を示し、さらに発展していくためには何が必要なのかを、本日は40年を振り返ることで考えてみたいと思います。まず、本学が創立された当時の様子や教育の考え方、それから現在の3学科になるまでの経緯、そしてどのようなカタチで将来に向かっていったらいいのか、という順序で話を進めさせていただきます。

では、創立された1966年頃の社会背景、それに対しての創立

者である諸澤みよ先生がどのようなお考えを持って創立されたかといった経緯に、いちばん詳しい中原先生から、その辺りをお伺いしたいと思います。

中原 短期大学は1966年に創立されたわけですが、本学のルーツは1909年に諸澤みよ先生が裁縫伝習所を開設したことに始まります。みよ先生は女性人間として、自立して豊かに生きていくためには、女子の人間教育・職業教育が不可欠だというお考えを持っておられました。1965年当時、時代の変化とともに女子の高等教育が望まれるようになり、そのような社会の流れの中で、短期大学を創立したということですね。

その当時は女性が専門性を持って仕事を続けていくという考えはまだ少なかった時代でしたが、将来の女性の生き方を考えた中で、学園の創立当時の伝統であり、また女子の仕事にかわりのある家政科からスタートしたというのが当時の状況であったと思います。

竹中 最初は家政科、次に幼児



世の中のニーズを見極め、教育に価値のあるものを様々に取り入れてきたことが、好調の背景にありますね。

卒業生が社会に根を下ろして、いい仕事をしてきているということが、教員としての生きがいです。

学生という存在を中心に、教員が人として社会につながれているという実感を持つことが多いですね。





幼児教育保育学科長
江波 諄子

ペンシルヴァニア州立大学大学院人間発達学部児童発達学科修士課程修了。専門・保育学、幼児理解。日本保育学会、OMEPE(世界幼児教育機構)会員。

教育科でした。創立者のみよ先生の意向が反映されていると思うのですが、当時の反応はどのようなものだったのでしょうか。

中原 1968年に幼児教育科を増設後、70年に附属幼稚園を開園しました。やはり世の中が変わってきて、子供に対する教育に関して一般の方が目覚めてきた時代でしたし、本学では幼児教育への取り組みに対して、綿密なカリキュラムとしっかりした研究の上でのスタートでしたから、大変社会から歓迎され、評価も高

かったという状況でした。

江波 当時、綿密なカリキュラムという話は、学外でも評判でしたね。その頃、私はまだ他大学におりましたが、その学長は敗戦直後の幼児教育の教育要綱が作られた際の中心人物で、その方が、常磐は学校設立時に文部省や専門家に相談しながら綿密に科目を作った短大ですと、よくお話されていました。その後相次いで幼児教育学科が全国に開設されましたが、本学科の場合、開設時の基盤がしっかりしていたのだと思います。

時代の激しい流れを読んだ、新しい学科の誕生。

竹中 本学の教育理念の一つにありますように、創立当時から世の中のニーズをしっかりと見極め、教育に価値のあるものを様々なところから取り入れてやってきたわけですが、1975年に入りまして、教養科という、それまでの分野とは違う新しい科が出てきました。その時に学科作りでご苦労されたのが佐藤先生ですが、その辺りのお話をお聞かせください。

佐藤 当時、ちょうど諸澤英道

先生がヨーロッパ留学からお帰りになった頃で、「日本の教育にはドイツ的教養というものが欠けているような気がするので、その辺をカバーする教養科を作り、新風を吹き込んでみようではないか」とおっしゃられて、まず秘書コース、そして教養コースを作りました。その時の学生は、今でも話題に上るくらい優秀でしたね。現在でも大学などで活躍している卒業生がいますから、そういう点でも教養学科ができたこ

常磐短期大学名誉教授 **佐藤 啓子**

東京都立大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程修了。専門：オフィス・スタディーズ。日本ビジネス実務学会評議員、全国大学実務教育協会常任理事。1967年から38年間にわたり、本学の発展に寄与する。





常磐短期大学副学長
竹中 治利(司会)

武蔵野音楽大学専攻科声楽専攻修了。専門：声楽。二期会、日伊音楽協会、日本ワグナー協会会員。

とは、常磐短期大学が、やがて大きな発展をする転換点になったと考えております。つまり、自分の専門職を探ることのできる短期大学という考え方です。学生がこれで生きてみようと思う専門を探る時には、広い地盤が必要なんです。当時のカリキュラムは2年間で様々な分野において、ある程度の知識が得られ、広い世界を見られるものでした。

これは寿命が短かったですね。経営情報学科の開設一年目から現在のキャリア教養学科に至るまでの経緯を、身を以て体験された安田先生にお話をお願いします。

安田 バブル崩壊の1年前にできた学科でしたが、世の中はまだ右肩上がりの成長をしていた頃でした。それまで情報と経営学は別々に発達してきましたが、社会のニーズとして「経営のわかる情報技術者」というのが必要とされるようになってきて、経営情報学科が作られたわけです。しかし世の中のIT化が急速に進み、どんどん技術が難し

くなつていったんですね。そうすると短大できちんとした情報技術者を養成するということが難しい課題となってきました。なにしろ四大ですら難しかったわけですから。その中でバブルも崩壊して就職も難しくなってきました。そうすると短大で何を教えるべきか、ということ非常に悩むことになりましたね。そういった経緯の流れで現在のキャリア教養学科は、教養と実学を重んじた「教養ある職業人の養成」をめざしています。これは常磐の伝統をリニューアルして作ったものであると考えています。

社会で活躍する 卒業生の姿から見る伝統への確信。

竹中 キャリア教養学科は常磐の伝統を受け継ぎながら、これからも進化していくでしょう。幼児教育保育学科は現在も学生がたくさん入学していますが、社会のニーズの変化などで、どのような苦労があったのでしょうか。

江波 1960年代から80年代

頃までは子どもの数もまだまだ多く、社会からも注目されていましたから、学生も集まり、就職も難しくはなかったんですね。ところが現在のように出生率が1.25だとか、子育てのしにくい時代であるとか言われ、今こそ量より質への転換を図らなければならない



1972年の常磐短期大学A棟



キャリア教養学科長 安田 尚道

慶應義塾大学大学院商学研究科博士課程単位取得満期退学。専門：経営学(労務管理論・環境経営学)。日本経営学会、日本労務学会、日本公益学会会員。

と感じています。もちろん常盤ではいつの時代でも質を大切にしてきましたが、本当にいろいろな意味で質が求められているように思います。ですから幼児教育では、知識だけでなく学生の心の奥底をゆさぶるような教育が必要かと。保育の仕事は社会から脚光を浴びようが浴びまいが関係なく地味な仕事ですし、それほど経済的にも恵まれる仕事ではありません。ですから仕事に対する使命感や喜びがなければ、一生続けてはいかれない仕事だと思っんですね。その辺りのことを大学で学び知ることが、とても大事なことでと考えています。

攻がありますが、これまではどのような状況でしたでしょうか。
千葉 うれしいことに、生活科学科の卒業生は、昔から県内で高い評価を受けています。毎年きちんと就職ができるということは、先輩が頑張っているということですね。これは家庭におさまる女子ではなく、社会に進出していく女子の姿、という創立者みよ先生のお考えが確実に生きていくということだと思います。

生活科学科は1987年に学科名が家政科から改称され、それが一つのターニングポイントだったかと考えますが、創立時から着実な学習から就職という流れは変わっていません。生活科学専攻は1996年に定員減という判断をしまして、少し心配した時期もありましたが、結果的に英断で現在も優れた学生が集まっています。食物栄養専攻は創立当時からずっと栄養士を育てて来まして、常磐に栄養士あり、という見方も定着してしましたから、これまでとくに懸念することはなかったですね。

佐藤 就職という話については、私には大きな思いがありますね。1967年に赴任した当時、就職の斡旋をするというのが私の大きな仕事でした。第一回の卒業生をどう送り出すかということで、茨城県の北から南まで回った思い出があります。その時の学生が、現在様々な場所で上に立つ立場で活躍しているのを見ますと、学校で徹底的に教育指導して、

生活科学科長 千葉 茂

岩手大学農学部農芸化学科卒業。専門：栄養学、食品学。日本栄養・食糧学会、日本栄養改善学会、日本健康体力栄養学会会員。



上手にファーストステップを踏ませてあげれば、その次の社会でのキャリア・アップは、自分自身で獲得していけるものなんだと確信させられます。



1970年頃 調理実習風景

現在の状況から導かれる、10年後への課題と抱負

竹中 本学は最初女子だけの短期大学でしたが、1990年に男女共学となりました。幼児教育保育学科にも男子が入ってきましたが、いかがですか？

江波 私は最初からこの分野は男子も必要だと思っていました。男女の両性が保育という仕事に携わることが、健全な保育の姿ではないかと考えます。とくに現代は女性の就業率も高くなりましたから、男子の学生はもっと必要ですね。

中原 今、男子学生の話が出ましたけど、40年間の短大の歴史の中での変化としましては、一つは

女子教育から共学へと変わったということ、もう一つは最近の傾向ですが、社会人の入学が非常に増えてきたことです。社会人の方はしつかりとした目的意識のもとに学んでいこうという姿勢があります。その影響として、クラスの雰囲気を変えているといういい面があります。とくに食物栄養専攻のクラスに多いですね。

千葉 そうですね。ここ何年かは急が増えました。最初は社会人の方が浮き上がってしまいうかなど気になりましたが、まったく心配いりませんでした。とにかく社会人の方は心構えも違いますが、

から。入学して成績でトップを続けて取っているのは社会人です。しかも社会人同士も競争しますから、不思議なもので他の学生も自然に何かやらなくては、という気持ちになるようです。十分底上げにはなっていますね。

竹中 社会人の方がいい影響を与えてくれているのは、幼児教育保育学科も同じだと思いますね。さて、ここで今回の改革の柱にもなっている「10年先の短大の展望」についてのご意見をいただきたいと思います。

安田 10年先を考える時、では10年前は現在についてわかってきたのかと考えますと、なかなか難しいことだと思います。やはり常に社会に対する問題意識を私たちがもちながら、一つ一つ応えていくことが大切です。現代の短大教育に求められているのは、教育と就職の架け橋をどのように架けていくのか、ということだと思います。そのためには、個人の力を高めて社会が必要としているレベルにもっていくことが重要です、教員全員ががっちりスクラムを組んで、いかに学生一人一人をサポートしていくことができるかが10年先を考えるとき、その試金



常磐短期大学名誉教授
中原 経子

日本女子大学家政学部食物科卒業。専門：応用栄養学、栄養指導論。栄養関係功労者として厚生大臣から表彰を受ける。日本栄養改善学会評議員。1966年から40年にわたり、本学の発展に寄与する。





石になるのではないでしょうか。

江波 社会の動きに敏感に反応していくという姿勢は大事だと思うのですが、幼児教育の場合には本質的なものを見つめていくという、いつの時代も変わらない部分があるんですね。社会で保育に関心が集まっても、浮かれないで本来保育が目指すものを見失ってはいけないということです。そして、短大での教育の在り方については、学生に自身の一生を支えてくれるような質の高い生きる作法を身につけさせていくことが大切だと思っています。

千葉 理念を安田先生に述べていただきましたので、私は敢えて方法論だけを申します。世間で

の短大のイメージは職業意識だと思えます。だた、それだけですと専門学校と同じになってしまう。専門学校にはないもの、それが教養教育です。ですから、その両方を持つことが大切です。また短大が地域に教育を選元するという使命を利用し、市民フォーラムや高校生フォーラムなどの形で短大を継続的にコミニャルしていくことは、短大存続にはかなり有効な方法ではないかと考えています。

佐藤 私が考えている事は二つあります。一つは18歳から20歳という実に教育のしがいのある年齢で、最初の階段を確実に上らせていくということ。もう一つは、同窓会を財産と考えて協力体制を積極的に敷いていくことです。これを上手に活用していくことで、卒業生のお子さん方を、本学に導いてあげることができると思うのです。また同窓会では会報や冊子が出されているのですが、昔のものを読み返してみると、そこには素晴らしい活躍をしたクラブや研究会の話が載っていて、この学校の財産が脈々と綴られているわけです。卒業生たちもこういつた財産を見る時の喜びというのものもあるでしょうから、今に結びつく形で何かこう

いったものを見直してみるといいのではないかと思っています。

中原 本学が10年後に生き残るために大切なことは、今までの先生方のお話の一つ一つがそうだと思います。そして、常磐短期大学が信頼されるということが、何よりも大切なのではないかと考えます。それには教員サイドの姿勢が大事です。創立者のみよ先生は、教育法を非常に研究された方で、当時、裁縫という個人教育でしたが、それを黒板を使った集団教育と組み合わせたり、さらには人間教育にも力を入れて、本当に情熱を持って教育に取り組んでいらっしゃいました。先生方一人一人が自覚して、学生たちに情熱を持って対応していくことと、社会の要請に合ったものを本学が教育していくことができれば、良い方向に進んでいくのではと私は考えています。

竹中 限られた時間内でしたが、非常に豊かなお話をいただきました。10年後の展望については、一人一人の先生が持つていらっしゃる情熱、これが絶えず続いていくようなら常磐短期大学の10年後もそれほど難しい状況ではないのではないかと、というようになことを感じました。本日は大変ありがとうございました。



(写真右) 1980年の航空写真
(写真左) 2005年の航空写真

常磐短期大学の沿革

- 1966年 常磐学園短期大学を開学(入学定員・家政科家政専攻40名、食物栄養専攻40名)
- 1967年 家政科食物栄養専攻入学定員変更(40→80名)
- 1968年 常磐学園短期大学に幼児教育科を増設(入学定員・50名)
B棟竣工
- 1969年 姫ヶ丘寮竣工
- 1970年 常磐学園短期大学附属幼稚園を開園
- 1971年 家政科食物栄養専攻入学定員変更(80→100名)
- 1974年 幼児教育科入学定員変更(50→100名)
- 1975年 常磐学園短期大学に教養科を増設(入学定員・50名)
D棟竣工、B棟増築
常磐学園短期大学創立10周年記念式典挙行
- 1976年 家政科家政専攻および教養科入学定員変更
家政専攻(40→80名)、教養科(50→100名)
- 1981年 幼児教育科入学定員変更(100→150名)
E棟(常磐学園本部棟)竣工
- 1983年 常磐大学開学
F棟(図書館)竣工
- 1984年 J棟(音楽棟)竣工
- 1986年 常磐学園短期大学創立20周年記念式典挙行
- 1987年 常磐学園短期大学の学科名称を変更
(教養科→教養学科、幼児教育科→幼児教育学科、家政科家政専攻→生活科学科生活科学専攻、家政科食物栄養専攻→生活科学科食物栄養専攻)
- 1989年 生活科学科生活科学専攻入学定員変更(80→100名)
- 1990年 常磐学園短期大学を常磐大学短期大学部に名称変更
経営情報学科を増設(入学定員・100名)
幼児教育学科入学定員変更(150→100名)
N棟竣工
- 1995年 Q棟(総合情報センター)竣工
- 1996年 短期大学部入学定員変更 教養学科(100→80名)、幼児教育学科(100→80名)、
生活科学専攻(100→60名)、食物栄養専攻(100→80名)
常磐大学短期大学部創立30周年記念式典挙行
- 1999年 常磐大学短期大学部を常磐短期大学に名称変更
常磐大学短期大学部附属幼稚園を常磐短期大学附属幼稚園に名称変更
- 2000年 常磐短期大学入学定員変更 幼児教育学科(80→100名)、
経営情報学科(100→80名)
- 2002年 常磐短期大学の幼児教育学科を幼児教育保育学科に名称変更
常磐短期大学入学定員変更 幼児教育保育学科(100→120名)、
経営情報学科(80→70名)、生活科学専攻(60→50名)
- 2003年 常磐短期大学の教養学科と経営情報学科を統合し、キャリア教養学科を設置(130名)
幼児教育保育学科入学定員変更(120→140名)
- 2004年 学生寮「茜梅寮」竣工
- 2005年 学校法人名称を「常磐学園」から「常磐大学」に変更
常磐短期大学附属幼稚園を常磐大学幼稚園に名称変更
Qs棟(情報メディアセンター)竣工



1970年 LL教室授業風景



1973年 被服作品発表会



1980年 姫ヶ丘寮



1980年 D棟カフェテリア



2005年 情報メディアセンター

人を生かす山



2006年5月のゴールデンウィークを利用して九州に向かい、荒城の月ゆかりの岡城址を訪ね、祖母山や久住山に登った。九重のミヤマキリシマの開花こそ早かったが、坊がつる湿原や硫黄山の噴煙を眺めながら、しばし至福の時を過ごした。そして、ここにいる自分が、何か別の存在であるかのようない不思議な感慨にふけった。

1987年、思うにまかせない体と、いいようのない不安。空腹感のないまま摂る食事と浅い眠りの繰り返しの日々。少しずつリハビリをかねての散歩から近郊の山へ。そして遠くへ遠くへと足を運ぶようになっていく。体調を整え、行動することで確実に体も心も変化する。いつの間にか、各地の山々に登りはじめて20年になろうとする。人に行くつもの生があるように、山にも思いもよらぬ数々の世界が展開される。私の山の始まりは「健康回復」

深い樹林帯の静かな山道に入る。時々、呼吸を整えるためにじっと立ち止まる。小鳥のさえずりや谷川のせせらぎの音に耳をそばだてる。緑の隙間から木洩れ日が幾筋もの光の帯となつてさしこむ。風につれて自然の醸し出す精気が辺りを覆い、体の一部が徐々に自然の中に同化していく。やがて道は狭く険しくなっていく。突然視界が開けたり、季節の花が現れる。尾根に

れば、谷は深くなり、空気の色も木々の様相も変わり、静けさは一段と深まって体はすっかり自然の中に溶け込んでいく。枝に手をかけ、岩場を通り抜ければ、ぐいぐい高度をあげていけば、呼吸が乱れ、体も熱くなり、あえぎながら稜線にでる。高山植物や谷筋の雪渓、遠くに眼をやれば山並がみえる。最後のガレ場を乗り切り山頂に着けば、熱いものがこみ上げてくる。ここでは身も心もまったく別の存在。切り立った断崖には、植物も必死に根をのばして生きていく。遠くの山のかたちを確かめれば、登った山々の懐かしい思い出がよみがえる。ガスがかかり、何も見えない山頂でも、登り通した喜びに変わりはない。私の山は「生の実感」

やがて、各地の山へ出かけるようになると、かねてから念願の歴史や文学の舞台を訪ねることも楽しみになってきた。関西では西行庵や能楽の天河神社と飛鳥の史跡。東北では啄木や太幸

の世界と数々の縄文遺跡や奥の細道。北陸では戦国朝倉氏の乗谷や蓮如の吉崎御坊。屋久島では吉備真備や宣教師シドッチゆかりの地など。何処の土地へ行っても遠い祖先や歴史の光陰を感じ、土着の生活や文学のときずまされた感性に深い思いをはせる。私の山は「歴史と文学の風景」

登山には危険もともなう。仙ノ倉山の稜線では閃光が走る雷雨の中、恐怖で身動きできず、茂みの中でじっと耐えていた。塩見岳で起きた落雷死亡事故の際には、現場近くで危うく難を逃れる。鷹ノ巣山ではツキノワグマと遭遇し、体が震えて足が動かなかったこともある。雲取山荘で管理人に台風接近中の登山への注意をうけたり、縦走中の唐松岳山荘や聖平小屋ではひたすら台風の過ぎ去るのを待っていた。前に進むか、引き返すかの判断とその結果には自分で責任を負わなければならぬ。天候や体調、コースの困難などとともに、何よりも登ろうとする強い意志と精神の高揚感が欠かせない。疲労や転倒・道迷い、予想もできなかった事態に遭いながらも、無事下山できた喜びは何事にも代え難い。私の山は「自己責任」

日常生活の中で私一人での営為は少ないが、登山の奥の深さは単独行にある。計画から準備と実行。木々の息吹、

稜線や山頂でのしばしの安らぎ、雲海の彼方のご来光やブロッケンへの感動。深く息を吸い、すべてを全身で受けとめる。山での行為そのものが、自分の生きる証と存在であり、かつ自由に独立していて完結する。結果に悔いはあっても、必ず充実感に残る。山も一人だけの世界ではない。登山道や山小屋で短い言葉を交わす見知らぬ人、病氣や障害と闘いながら歩いている人、美しい高山植物や山頂での展望を共にする人。山で足を運びながらも、家族や仕事、出会った多くの人達に、時間や空間を超えて思いを巡らすことも多い。私の山は「日常の中の非日常」

山はそれぞれ個性豊かである。何度も通った奥久慈男体山、川を遡行した幌尻岳、雪渓歩きを楽しんだ白馬岳、鎖を使って登った剣岳、大バノラマの槍・穂高、花崗岩の美しい甲斐駒ヶ岳、崩落の激しい伯耆大山、白装束姿の多い石鎚山、海に突き出した開聞岳、身を削り取られた武甲山。丹沢のブナや奥日光ではダケカンバの立ち枯れも目立つ。山を取りまく自然環境や社会環境にも激しい変化がある。

年が明け、四季が変わり、また次の山へと向き合うことで仕事や生活にも新しい意欲と課題が生まれてくる。今、私の山は「生きる力」

常盤大学高等学校 教頭

内田紀雄

自信を生んだ大学生活

「大学で何を学んできたのか」と聞かれたときに、自分が胸を張って答えられるということに、私は嬉しさを感じます。

私は、来春社会人として第一歩を踏み出すために、3年の冬から就職活動を始めました。企業の方と面接をする際、必ずといていいほど投げかけられる質問の中に、大学生活についてのことがあります。この質問以外にも、様々な質問に自信を持ってしっかり自己をアピールすることができたのも、大学での4年間があったおかげだと思っています。

特に、ゼミナール活動での経験は、大変貴重なものでした。私の所属するゼミナールでは、企業の方から

依頼を受けて、消費者の視点にたって商品の販売促進の提案を行なう「マーケティング」について学びました。最後に行なわれる報告会に向けて、調査を実施して、調査結果の分析を行なったり、アイデアを出し合ったり、プレゼンテーションの資料や報告書を作成したりと毎日がとても忙しかったのですが、今振り返ると、その一つずつが私を大きく成長させてくれたように感じます。

常磐大学で積みあげてきた経験は、私の糧となり、今後のよい励みになると思います。充実した大学生活を送れたことは、私にとっての誇りです。



国際学部国際ビジネス学科4年
星野 麻奈美

「プレゼンテーション演習」の成果

短期間で社会人として通用する知識と技術を身に付けたい。そう思いキャリア教養学科を志望しました。実際にキャリア教養学科では、ビジネスマナー、敬語・言葉の使い方、パソコンスキルの取得などためになるものばかり。その中でも特に「プレゼンテーション演習」は実践的でとても役に立っています。

「プレゼンテーション演習」を学び始めた当時、人前で発表を行うのが嫌でした。何をどう話せばいいかわからないし、緊張してしまい自分の思うように喋れなくなってしまうからです。

この授業では主に発表を中心に進めていきます。聞き手に話す内容を

考えながらプロットを制作します。使うツール等を準備してよいよ発表。発表した後はクラスの人たちにアンケートという形で評価してもらえます。書いてもらったアンケートを見て自分の改善点を発見し、次のプレゼンテーションにつなげる事ができました。

授業の中で場数を踏んで行くうちに緊張をしなくなり、伝える目的意識をはっきりさせて喋れるようになりました。おかげで就職面接でも存分に自分を企業に売り込むことができ内定をいただきました。

残りの短大生活も自分自身を磨いていき、充実したものにしていきたいです。



短期大学 キャリア教養学科2年
鹿島 槇

楽しさと真剣さが同居した 絶妙な間合いから、 全国大会出場への 活力が生まれる。



剣道部

ここ1、2年でメキメキとレベルが上がったという剣道部。その理由は、昨年からはまった剣道部のスポーツ推薦入試。現在の1、2年生はすべて有段者というかつてないレベルの高さになった。しかし剣道部の練習風景をのぞいてみると、活性化の要因は、それだけではなさそうだ。剣道部を引っ張る主将と副主将に聞いてみた。

現在、男子16名、女子19名の部員の中、1年生が10名。そのうち女子が7名を占める。昨年からはスポーツ推薦入試制度導入で、1年生と2年生も全員が有段者。しかも、県大会などで優秀な成績を残した学生ばかりである。一昨年末までは部活としては寂しい内容だったという主将の宮内さんは「やはり去年あたりからレベルがぐんと上がりましたね。自分が1年生の時には先輩がいらないような状況でしたから、雰囲気はガラリと変わりました。」とうれしそうだ。副主将の佐川さんも「高校生で取れる段が3段まで。入部してくる1年生はほぼ3段の有段者ですから、人数も増えたぶん、部内の選手争いも熾烈になってきました。しかも女子が増えて雰囲気

気は明るくなり、全体的にいい刺激になっています。」と喜ぶ。剣道部の目標は全国大会への出場。しかし、道は易しくはない。100校近く出場する関東の大学レベルは全国でもいちばん高く、その中で関東学生剣道選手権大会で20位までに入らないと、全国大会への切符は手に入らない。厳しい状況だが「全国大会への壁は高いですが、昨年の試合でも個々の能力ではあまり差がない試合もいくつかあり、収穫もありましたから、そろそろ行けそうな手応え



(写真右)

宮内勇二 主将
(国際学部 国際ビジネス学科 4年)

(写真左)

佐川拓史 副主将
(人間科学部 現代社会学科 3年)



を感じています。「宮内主将」と見通しは暗くはなさそう。目標ひとつに向かう姿勢は、練習にも現れている。週4〜5日、夕方2時間の練習は、まず基本打ちから始まる。組みになり面打ち、小手打ち、胴打ち、突きと引き技などを順に5分ほどした後、各自で不得手な技を練習し、最後はかかり稽古で終わる。「いちばん辛いのはかかり稽古ですね。15秒間くらい息を継がずに打ち込むことを10分ほど繰り返す続けるのですが、気力体力の限界への挑戦みたいなものです。」(佐川副主将) 剣道では足が止まる、という言葉がよく言われるが、これは体が止まっているように見えるが、実は気持ち止まってしまうことだと「言う。」最後のかかり稽古で自分を追い込み、自身を鍛えていくんです。面をつけると視野が狭くなりますから、相手の動きを絶えず正確に読み取るには、どんな状況においても集中力が必要。精神力の鍛錬は不可欠です。「宮内主将」その精神力がないと、試合での緊張感にも打ち勝つことができないということなのだろう。

同様にその精神力は礼にもつながっている。剣道は礼に始まり礼に終わる、と言われるように礼儀を尊重している。これは剣道

が精神と身体を鍛錬し、人としての完成を目指す武術であり、礼は精神修養の面から必要とされるものだからだ。「剣道を習い始めた小学生の時にいちばん最初に習ったのが礼の仕方でした。」(佐川副主将)「段審査の時も試合の時も、新しいきれいな胴着を着ます。それは礼でもあり、自身の姿勢も含めて厳しく見られますから。日常生活の中でも剣道をやっている人は、若い人でも挨拶がきちんとできているし、試験での集中力もいんじゃないかな(笑)。」(宮内主将)

礼や精神力と言った少し重く感じる言葉が、彼らの飄々とした会話からは、とても自然に気持ちよく感じられる。確かに練習中は皆真剣な面持ちではあるが、休憩の合間に見せる笑顔や屈託のない笑い声には、楽しい部活そのものの印象だ。「今は未経験者ゼロですが、興味のある人はぜひ来てほしいと思っています。全員が有段者なので教えられる人間ばかりです。任せてください。」(宮内主将)「とにかく思いきりやってみたい人は大歓迎です。」(佐川副主将)固くならがちな身構えを解いてくれそうな言葉だ。せひ度、柔剣道場を覗いてみてはいかがだろうか。



男子女子、先輩後輩の垣根のない、明るく和気藹々とした雰囲気。剣道部だが、練習を始める直前、先生を前にして皆で神棚に向かい黙祷し、礼をしたその瞬間、みな真摯な面持ちに、道場の風景も一変する。この切り替わりの清々しさに、見ているだけでも身が引き締まる思いだ。

Tokiwa News

トキワニュース

常磐大学高等学校と常磐大学幼稚園から届いた最新ニュースを紹介します。

常磐大学高等学校

2006年度 第1学期を 終えて



「06総体THE近畿インターハイ」に出場の体操部

7月20日、第一学期の終業式が第一体育館で行われた。浅岡校長から、人は何のために勉強するのか。学習することの意義・思索することの大切さについて話があり、加えて踏切内であやまって立ち往生していたお年寄りが本校生に助けられ、命拾いをしたというお札の電話をいただいたという話題があった。また、国道50号をカルガモの親子が渡ろうとしていたところ、警ら中の警察官が発見し交通整理中、ここでも本校生が警察官とともにカルガモの親子の横断に協力したと、わざわざ交番からお礼の電話をいただいたということも紹介された。その時、話を聞いていた全校生の中から思わ

ず拍手がわき起った。日常での些細な「善行」ではあるが、その行為を生徒みんながたたえ合う、とても良いひとときであった。六月下旬からアメリカ・ケンタッキー州から短期留学として一年生の授業に出席していたロビン・マククラナハンさんからは「三週間の短い期間ではありましたが、常磐で過ごせたことは大変良い思い出になりました。」と日本語でスピーチがあった。ここでも全校生徒からあたたかい拍手がロビンさんに送られた。

各部活動、各種検定で優秀な成績をおさめた生徒は各学期終了時に表彰を受けている。今学期は特に運動部の活躍が取り上げられ、多くの生徒が表彰を受けた。体操部は関東大会において女子が団体四位、男子が六位に入賞した。また、「06総体THE近畿インターハイ」の予選を兼ねた県大会では団体で男女アベック優勝を果た

し、インターハイ出場を決めている。男女で団体出場は初の快挙である。水泳部は、県大会で自由形の選手が男女で活躍し、男子のリレーも含めて五名の選手が関東大会に出場する。陸上部でも男子棒高跳で関東出場を果たした。ソフト部は春季大会で第三位に入賞。昨年度、初の関東大会を経験した男子バスケットボール部は、県専門部から本校主将が優秀選手に選出された。

各種検定には、それぞれ多数の受験者があり、今学期中に合格証が届いたワープロ検定では、二級82名、二級50名が合格、一級には9名が合格し、近年にない結果をおさめた。英語検定などまだ判定の届いていないものもあるが、二学期には表彰対象者が多数出ることを

期待している。

夏休みを前に進路指導部からも各学年に応じた学習のアドバイスがあり、「この夏」を充実して過ごすための諸注意が告げられた。

第一学期の区切りとしての終業式は、ほのぼのとした話題があり、日々努力している生徒達の表彰もあった。同じ常磐生として積極的に活動している生徒のがんばりをみて「よし私も頑張ろう」という励みになれば最高である。

期待している。



リニューアルされた最新パソコンでの情報処理授業

水生植物園での かかわりの なかで



常磐大学幼稚園は、豊かな自然環境の中にあり緑に囲まれた素晴らしい幼稚園です。園庭に隣接する『トキワの森』には、いろいろな木々や草花があり、春にはタラの芽やウラボシなどが顔を出し、たくさん松ぼっくりも木から落ちてきます。秋には、様々なドングリを使つての遊びが子どもたちの活動に広がりを持たせています。

また、遊戯室裏の『水生植物園』の湧き水が流れる池には、ミズバショウやザゼンソウ、コウホネ、ノハナシヨウブが咲き、オタマジャクシやヨシノボリ、ドジョウ、ザリガニ、サワガニ、ヤゴ、カワニナ、ホタルの幼虫などたくさん生き物が

が生息し、ゼンマイや竹の子ども顔を出します。

前年度までは、貴重な植物が多く繁殖していること、また、その環境を子どもたちの生活に生かそうという意識が薄かったこともあつて、あまり活用できていませんでした。少しずつ環境整備を行い、子どもが水生植物園に出会い、活動する姿を捉え、子どもたちの生活を豊かにしていく新たな視点を見出しました。

その水生植物園でのかかわりの中で教師も豊かな感性を持つて、子どもが発見に共感したり、活動を深めるために考えたりすることが、子どもの考えようとする気持ちを高めていくことに大きな影響を及ぼすということがわかりました。

今年度当初、水生植物園の湧き水が流れる池に蛙がたくさん卵を産んだことから端を発し、オタマジャクシとりを始め、オタマジャクシを飼っている水槽の中にたまたまヤゴがいてオタマジャクシが餌食になっていくことから「弱肉強食」の原則に驚きを覚えたり、それらとほぼ同時に始めたザリガニとりにして、カワニナが多く生息していることに気付いたりし、潮干狩りのように何十匹もザルで掬いました。たくさんのカワニナをとっていたころ、ホタルの事を図鑑で調べているとカワニナの稚貝をホタルの幼虫が食べるということも分かり、慌てて池に戻りに行きました。



また、保育室で飼っているザリガニ同士で戦いをさせて、こっちの方が強いとか歓声を上げて戦いごっこをさせている姿が見られました。ザリガニは、「共食い」をするので保育室では一匹ずつそれぞれの入れ物に入れて飼っているのにわざわざ一緒にして戦いごっこをさせるなんて、昔と変わらず子どもも、残酷な面も持ち合わせています。ただ、ここで大切な事は、「弱肉強食」や「共食い」を見てそのまま終わらせないことだと考えています。地球上の生き物（人間以外）は、無益の殺生をしないということを教えるければなりません。地球上の生き物（人間以外）が殺生するのは自分が生きていくために目の前にいる相手を倒さなければならぬ必然性があるときだけです。つまり、生命維持のためだけの事です。でも、人間だけは違います。無益な殺生を今も続けています。戦争にばかり、動物の乱獲にばかり、自分の利益のみを追求しての殺生です。人間がいつの日か

無益な殺生をしなくなる日が来るまで、このことを子どもたちに伝え続けていかななくてはなりません。そして、このことは、食べ物を粗末にしないという教えにもつながります。食べ物の命を頂いて自分の生命が維持できることを謙虚に受け止めなくてはならないことを貴重な経験を通して、子ども一人一人に知らせていきたいと考えています。

水生植物園とのかかわりの中で人間が生態系の頂点に位置するに相応しい生命体となり得るために地球上のすべての物事を如何に考えていくべきかを子どもたちと共に教師も考えていかなければならないという責務に駆られています。



表紙説明

常磐短期大学 A 棟

見和キャンパスは、1966年に建設されたこのA棟から出発した。当時、法人室、事務室を備え短大の中核機能を担っていたこの建物も、改修を重ねてその機能も他に譲った。

現在は発足時の面影を残しつつ、短大の主要な教室棟としてピアノレッスン室、食品栄養実験実習室等が設置されている。一部は、コミュニティ振興学部のミュージアム資料室としても使われている。



イラストレーター／佐々木悟郎

CONTENTS

1 特集 座談会録 常磐短期大学創立40周年を迎えて **40年の歩みと これからの常磐短期大学**

9 教員エッセイ 教員から寄せられた研究分野の魅力や逸話を紹介

10 キャンパスレポート 学生生活の中から寄せられた声を紹介

11 Close Up Tokiwa 「サークル紹介」 「剣道部」

13 Tokiwa News 常磐大学高校、常磐大学幼稚園から届いた最新ニュースを紹介

常磐 TOKIWA

Sep. 2006
vol.7

発行日 2006年9月
発行 学校法人常磐大学
編集 常磐大学 企画広報課

〒310-8585 茨城県水戸市見和1丁目430-1
Tel.029-232-2511 (代)
<http://www.tokiwa.ac.jp/>



2009年に迎える学校法人常磐大学の開学100周年と今年迎えた常磐短期大学の創立40周年を記念し、ロゴマークを作成しました。